

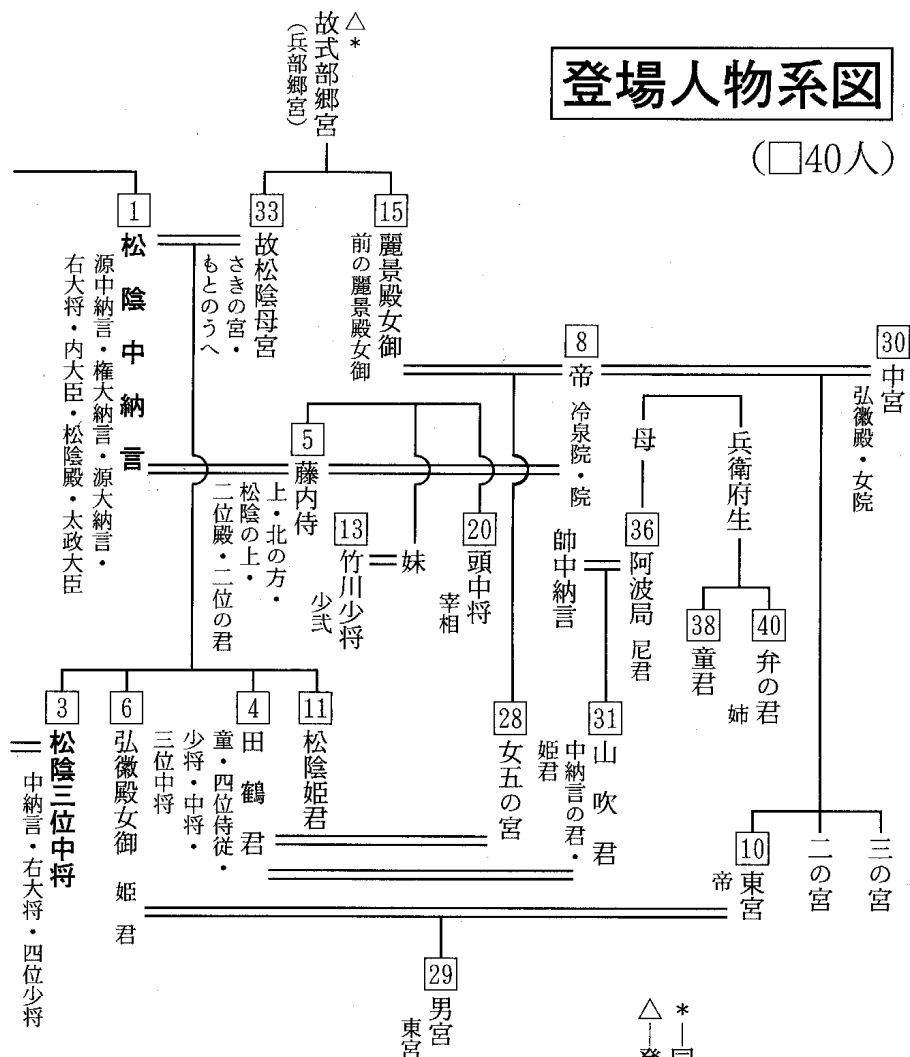
『松陰中納言物語』の特色と最末部の解釈

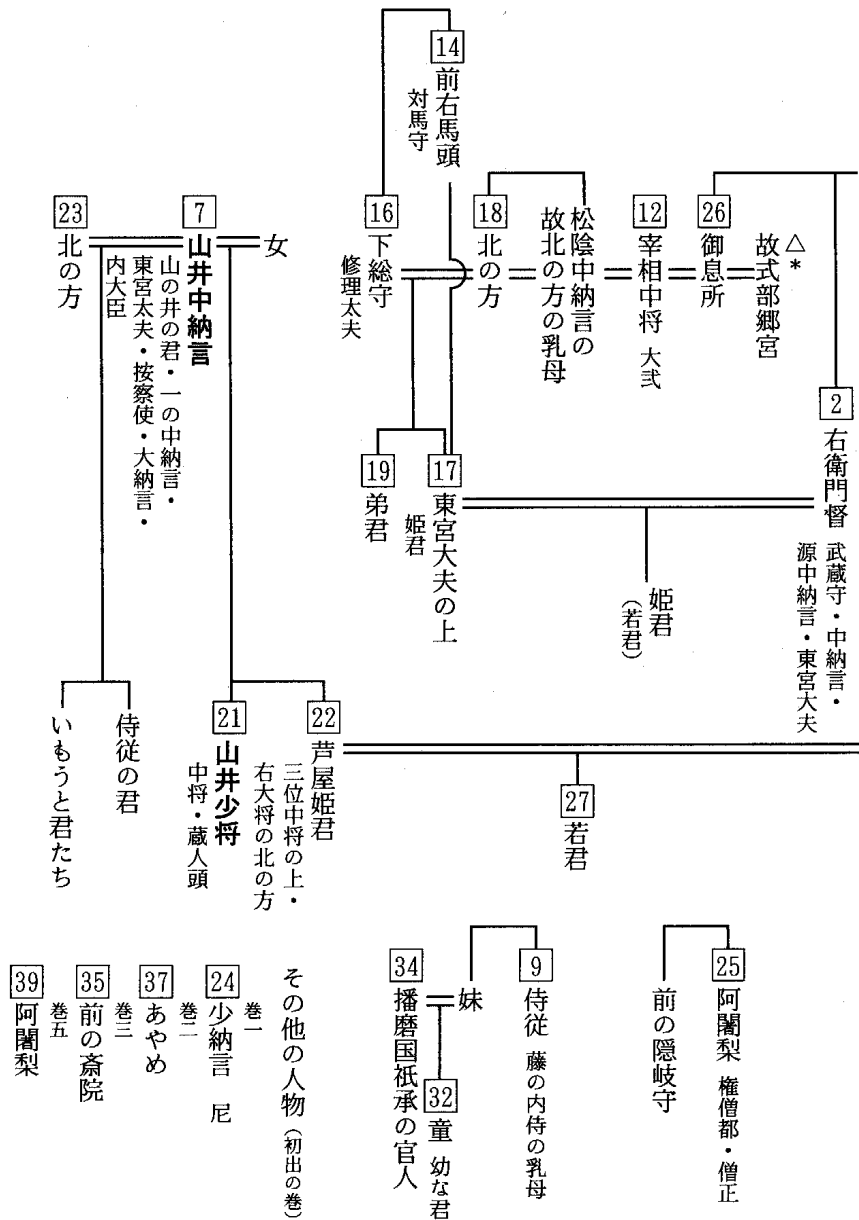
山本いずみ・阿部好臣両氏の解に触れて

八 寫 正 治

登場人物系図

(□40人)





この物語は最近二つの現代語訳が出たが、その最大の問題点はこの物語全体に出て来る「三位中将(少将)」と称されている人物の実体である。系図③の松陰三位中将であるが、④の田鶴君も「三位中将」と称されており、果して③の人物に統一してよいかの問題なのである。山本いづみ氏の現代語訳だと、すべて「松陰三位中将」と称しているので、同一人物として解釈される懸念がある。他に「松陰右大将」があるの

で単なる表現の問題であろうが。一方、阿部氏の解では、巻四・巻五の人物をそれ迄の人物と別の人間とし、系図の中の田鶴君に当てゝいる。問題の所在がはっきりして居るので今回はこの問題を中心に、この物語の構造を探らうと思う。私の見解は後者をとっているので、この「三位中将」なる人物を巻三迄は「松陰三位中将」とし、巻四・五では「田鶴君」と称して執筆して行く。

(注) 二著の紛介は既に済んで居てこゝでは省略する。短歌雜誌「まひる野」九月号参照。

一

私は卷四の「うひかふり」以降活躍する三位中将を田鶴君と解する。抑々、初冠は三宮と田鶴君の為の催しであり、ここから主人公が變つて当然なのであり、卷四以下の「松陰中将」は総て田鶴君なのである。松陰三位中将には芦屋姫君が居り、この芦屋姫君は山井中納言の妾の子であり、山井少将の妹であつて、物語上は既に決着がついているのである。「御かはらけをたまはせければ、わかき御心には、いとほつかしとおほし給へり」と田鶴君は大變好感の持てる少年として画かれている。松陰三位中将であつたらこうはいかないであらう。

「宇治川」の冒頭の山本氏の訳は次のようになってゐる。松陰三位中将は、「明日は宇治のお宿ですね。」と人が言っているのをお聞きになり、山吹君をお訪ねにならうと思つた。

原文の方は次の如くである。

三位中将は、「あすは宇治のやとりにこそ」と人の言なるをきゝ給ふて、

山本氏も原文の三位中将を田鶴君と承知して訳しているのかもしれないが、これを訳文の方で「松陰三位中将」としている

所に問題があるのである。卷四冒頭で田鶴君の初冠が記される訳であるが、卷三最末の「ねの日」の山本氏の現代語訳では次のようになってゐる。

(初子の日) 松陰三位中将(のお屋敷)には、人々がやつて来て集まつてゐる。

夜になり管絃の遊びになるがこゝでも田鶴君が活躍する。私流に訳すと、

松陰三位中将が宰相君に琵琶を引かせようと要求なされたので、田鶴君が(中にお入りになって、その琵琶を)取り出していらつしやつた。

この部分、原文では「三位中将には、人くまいりつとひ給ひて」又、「おとゝもわたらせ給ひて、……田鶴君とり出たまふて」とある。卷四では他にも、三位中将は松陰三位中将であり、卷四の最後「やまふき」で、松陰三位中将は中納言に、そして最後近くで松陰中将(田鶴君)は三位になるのである。要するに卷四内部と卷五では位・名称を異にするのであり、「宇治川」冒頭の山本氏の訳「松陰三位中将」は、卷四迄の松陰三位中将と同一人ととらえられている可能性がある。その点、阿部氏の現代語訳は、「三位の中将④(山鶴君)は、」とあつて明瞭である。

現代語訳で、最も注意しなければならないのは、やはり位階と名称変化の問題であると思われる。原文と並記する形だと一々確かめつゝ読んで行くが、現代語のみだと独走してし

まう。山本いずみ氏の「現代語で読む『松陰中納言物語』付本文」等は、少々その弊があり、巻四の最末「やまふき」で、「松陰三位中将」という人物が入れ替るのであるが、全く同じ名称なので、以後の読解に誤解を生じて来る虞があるのである。松陰中納言には四人の子供が居り、私はそれを③松陰三位中将・⑥弘徽殿女御・④田鶴君・①松陰姫君と称している。ところが巻四最末で位階が昇進し、巻四迄中心的に活躍して居た松陰三位中将と呼ばれていた人物が松陰右大将となる。そして巻四に於いては④田鶴君の初冠が記され松陰三位中将となるのである。私は人物の名称は、極官で統一したり、その時点時点で呼ぶ方法もあるが、その人物を象徴し彷彿とさせるような名称で統一した方が良いと思う。名称上の□内番号は系図との対象の為に付したものであるが、通称は系図に定めたものが相応しいように思う。問題は原文で四人の兄弟の中に二人に「三位中将」の名称が付されている事で、この名称は巻四迄は長子に付されているのであるが、巻五に至り田鶴君に付される事となる。巻五で、この田鶴君が大活躍するのであるが、迂闊に読んで居ると巻三迄と同一人物が巻五でも活躍するように誤読されてしまうのである。田鶴君の名はその活躍に相応しく、尼の死と大弔の出家とに関連して書かれたもので、若者を画いて結末を未来の明るさに繋げようとする作者の意図によるものであろう。

この名称の問題が集約的に現われるのが巻四と巻五である。

巻四冒頭「うるかふり」で田鶴君は四位侍従を与えられ、又、少将にもなるが、巻末「やまふき」で中将に昇進、山本氏も以後、松陰三位中将と訳されていられる。ところがこの書の冒頭「山の井」から、この物語の主人公「松陰中納言」の長子も又、原文では「松かけの中納言」として出て来ており、その人物をも「松陰中納言」と山本氏は訳しておられる。

問題は最末の「宇治川」で特に活躍する三位中将である。私の誤読でなければ、どうも山本氏は、この三位中将を松陰中納言の長子の「松陰三位中将」と解している節があるのである。確かに松陰中納言の長子が三位・中納言と呼ばれていた時期はあるのだが、「宇治川」で活躍する三位中将とは別人である。山本氏がこの両者を同一人と考えているらしいのは、訳が総て「松陰三位中将」とされているからである。松陰中納言であると決定的に記した所がないので山本氏の真意は酌み難いのであるが私はこの人物を田鶴君と考えている。原文ではこの人物を「男君」「おとこ君」「三位中将」「中将」「との」と記しているが、最後の「との」こそ、訳文では「殿」としているが指しているのはこの人物のみ松陰三位中将である。その外にこの巻には「右大将」と称する人物が出て来るが、これこそは、松陰中納言の長子なのである。それ以外は総て「松陰三位中将」と山本氏は訳されているが、そう訳するとこの人物は系図で見ると③の松陰三位中将に他ならなくなってしまう。しかしこの人物の活躍期は既に終っ


ており、芦屋姫君との間に若君さえ儲けているのである。一方、田鶴君は卷四末の「やまふき」で、四位侍従から三位中将になり、名実共に松陰三位中将と呼ばれて然るべき人物なのである。三位になった華やかな日に、山吹君から声をかけられる。

暮つかたより、御池の汀にかゝりたかせて、御船にて御遊のありけるに、三位中将は嶋さきの岩のうへにゐ給へるに、船のうちより、「その山ふき、ひと枝折て」といとおかしき聲にて聞えければ、

既にこゝで三位中将と呼ばれているのである。それよりも重要な事は、この山吹君との関係が綿々卷五に迄及んでいる事である。「宇治川」には次のような文章がある。

三位中将は、「旅のうらふれ」とて、あそひにもかゝつらひ給はず。わらは君に、「こよひあひたてまつらんつれ、(船君のいらしやる所へ迄)道しるへを」とのたまはずれば、

田鶴君は童には山吹君を自分の姉と言っているのである。ともかく、山吹君との関係は松陰中納言の長子との関係ではなく、田鶴君との関係なのである。以下、田鶴君・山吹君・大式・童・尼の間で物語は展開し、そこに松陰中納言の長子が入って来る余裕はない。もし、こゝに現われる三位中将を松陰中納言の長子とするならば、次子田鶴君はなくてもよがな存在になってしまう。尼の死・大式の出家がこの部分の目的であるが、それに絡む田鶴君・山吹君・童君等の活躍は、

この物語の挿話的側面を代表するものであろう。たゞ山吹君入水の後に続いて、童君が「をくれたてまつらしと、ともにつゝき侍りしに」とある、童君の心理の内容が少々不可解である。恋の為でなく、傍観者の立場にある童の行動としては、あまりに行きすぎていると思われるからである。

この物語はその名の通り松陰中納言の物語である。この主人公は静謐で宗教的で審美的、殆んどが悲哀と美しい風景の中に居る。六年間の経緯の中、最初の一年目は山の井の中納言の動静をうつつして、松陰家が紹介されるのは第二年目からである。従って松陰中納言は三十六歳から卷末の四十賀迄、即ち五年間が描写される事になる。長編性と挿話性が程よく案配され、通俗味がありながら、質の高い面白い物語である。この松陰家と対立するのが山井家で、統主は山井中納言である。山井中納言は、帝の御前で何度か一緒に演奏した藤内侍に心奪われ、その乳母・侍従の協力を得て、何とか振り向かせようとするが一向に埒が明かない。一方妻を失った松陰中納言も藤内侍に熱を上げるが、帝の覚えもめでたく、藤の一枝と交換に藤内侍を譲り受ける。また帝の御行幸の翌日松陰邸を訪れた東宮は、かねてから気になっていた松陰中納言の娘にますます思いを募らせる。対立する山井中納言は面白くない。たまたまやって来た宰相中将（大式）、竹川少将（少式）・右馬頭・侍従を仲間にし、松陰中納言に無実の罪を着せ、隠岐の島へ遠流にしてしまう。以上が卷一である

が、極めてすっきりした筋立て・対立関係になっている。

全五巻から成る物語であり、軸は二人の中納言の出世にあるが、松陰中納言を陥れた四人の男女の救済の物語が絡み実はかなり内容は複雑なのである。大きく物語は聖性と俗物性とに分かれ、聖性の代表は勿論松陰中納言であり、他の登場人物は何らかの形で俗物性を備えている。松陰家と山井家が対立関係にある事は既に述べたが、この両家は奇妙な所で繋がっている。山の井家と松陰家は対立しながらも、松陰中納言の息・松陰三位中将と山の井の中納言の息・山井少将と親しい。又、山井中納言（按察使）には正妻の外に妾がいるがその妾の子に大将上（芦屋姫君）と称する女の子があり、松陰中納言息は以前から興味を持っている。ところが、山井中納言はその子（芦屋姫君）の行く方がわからず心を痛めていたのであるが、松陰邸に呼ばれた山井中納言は、そこで松陰中納言の息の妻になっていて娘を発見するのである。この記事は巻五の冒頭部であるから、その間に芦屋・須磨や播磨との往来や男女関係の話もあり、かなりのドタバタ劇の様相を帯びるが、それが極めてアイデアに富んでいて面白いのである。山井中納言の北の方は妾の子を芦屋へ追い出すだけでは気がすまず鬪播磨の官人と結びつけようとする。中心になっているのはこの松陰中納言を中心としたストーリーであるが、この物語の時間性の中には他の多くの素材が含まれ、私はこの中編ストーリーの中から時間を感じさせる一つの素材を取

り上げたいと思う。

（松陰中納言の弟）

右衛門のかみは、あつまのえひすをとろく／＼にてたいら

けさせ給ひて、下野国におはしますを、（それを、下総守は）

しつきて、我御もとへいれたてまつる。（下総守）此国のかみ北のか

たは、源大納言のさきのうへの御めのとよりける人のいも

うと也ければ、おさな子ましくしよりしたしみ給へり。

下総守の北の方は松陰中納言の先妻の御乳母の妹なので、右

衛門督とは小さい時から親しくしていた。一方、下総守夫婦

は兄の、先の右馬頭の御娘を養女にして自分達の子供のよう

に慈しんで育てあげ東国迄一緒に連れて行った。その姫君は

とても可愛らしい御様子で、性質もやさしかったので妻にし

たいと申し込む人が大勢いたけれど、下総守夫婦は、『東国

の人と一緒にさせるのは不本意なことだ』とお屋敷の奥の方

に入れ、大切に守り育てていらっしやう。内々は右衛門督

にと考えていたのだが琴と笛の縁により晴れてその妻になる。

東宮大夫の上と称するこの姫君は、修理大夫（下総守）の養

女、前右馬頭の実子であった。

前右馬頭は実娘（修理大夫の養女）と再会する。松陰中納

言一行は初瀬寺を出立され、夜の間に移動して宿坊までお帰

りになる。その道中で、山陰に仏の御名を唱える声が、大変

尊い感じで聞えて来た。仏の話をした後、それを、松陰中納

言は、『あの右馬頭だったのか』と呟く。しかし、前右馬頭

はその実子とも離れて仏門に帰依していたのである。

最後の章「宇治川」の結末は実に躍動的である。女院の慥憑で大式と山吹君が近づく。それを阻止する為、田鶴君は舟で山吹君のいるあたりに生えている小高い柳を目印にして宇治川から姫君の屋敷へと漕ぎ寄せる。それから後の話は童君から語られる。童君は庭に出て行く姫君の御後にこっそり到着き従ってその行動を見て居た所、山吹君は岩の上にお立ちになり、上にはおっけていらした衣を柳に脱ぎ掛け、そのまま御身を川の中に沈めてしまわれた。驚いた童君は、それでも山吹君に遅れてはならないと思い、一緒に続き、川に身を投げました。ところが運良く、そこに漕ぎ寄せてこられた松陰(田鶴君)三位中将の船の中に、山吹君ともども落ち込んだのですが、幸運なことにも、二人とも助かったのです。それで、これ幸いとばかりに、お船を急がせて、伏見の里に漕ぎ寄せ、そこからは車に山吹君を乗せて、こちらに辿りついたのです。お二人はこれほどまでに深いご縁で結ばれていらっしゃるので、来世迄も頼もしいことですよ。と、こんな風に語るのである。この部分の前節、阿部氏の訳は次の如くである。

松陰中納言は局にいた弁の君を、こっそりと、お呼びになれたところ、弁の君は「松陰中納言様のせいで、お亡(尼君)くなりになられたのですよ。童君も、お供をしてみました」と松陰中納言のお袖に縋り付いて泣く。「もっともなことであるよ。山吹君のお役に立つように、京の都で、こっそりと、仏事を執り行うのだ。……」

弁の君と松陰中納言の会話である。未だこの時点では、尼・田鶴君・山吹君の中、松陰中納言は尼と山吹君の死を信じている。この場合、童君は傍観者である。

目に涙をいっぱい溜めて「もしも、京の都の田鶴君からお尋ねがあったらこの手紙を差し上げなさい」と言って、山吹君が童君にお預けになられて、お庭の方角にお出になられるのを、童君は、変だと、見て気付き、後に付いて行く。童君の性格については後に触れるが、傍観者であり、猶且、人間関係に世話をやきたい性格の持主なのである。

最後の問題点、山本いずみ氏の記によると、童君の言葉の中に「(お二人は、)これほどまでに深いご縁で結ばれていらっしゃるので、来世迄までも頼もしいことですよ」の(お二人は、)の二人は田鶴君と山吹君と結論づけてもよいかと思われる。そしてこの記述の目的は飽く迄、こうした人間関係にあるのではなく、大式の最後を書く事に目的があったと思われる。尼の死を知り、大式に関する本文は次のようになっている。

むなしき御からを、その夜、上の山にてけふりとなしたてまつる。大式の君は、はからさるうき事を身のうへにひきうけ給ふて、過こしかた事ともをおもひつゝけ給ふに、『ふかうなるすぐせのみならず、後の世いとおそろし』とおもひとり給ふて、

露霜とつもるうき身のつみとかは

朝日の山にきえやわたらん

と詠したまふて、あさりにかしらをおろさせて、そのまゝに庵しめ給へり。

つまりこの大式と田鶴君との鞘当ての部分、阿部氏は田鶴君と山吹君の恋の成就と考えているのである。

個性的な人物・童君は兵衛府生の子、尼君の母君と兵衛府生は兄妹、従って尼君と童君は同世代に属し、この「宇治川」の主人公・山吹君は次の世代に属する訳である。この系図に登場する故式部卿御息所は松陰中納言の妹に当り、巻三で、大式と関係するが、侍従から、大式が事件に加担していた事を聞いた松陰中納言はこの妹だけを残し、大式・侍従等を大宰府へ送り返す。結局、大式と故式部卿御息所の関係は一時的なもので、大式は山吹君と結ばれるのである。この作者はこの種の事件の顛末を画く事が好きで、この物語の最後にも一つの波乱を起させる。物語全体の流れからは必然性のあるものとは思われないが、躍動性も齎らすという効果があると思われる。

松陰中將(田鶴君)は初瀬詣での帰り、再び宇治に立ち寄り山吹君と再会するが、その後はたゞ手紙のやりとりのみが続く。その間に意外な事件が進展して行く。

抑この事件は、女院が使っていた女房・阿波局に発する。そこへ帥中納言が通って来て二人の間に姫君が一人生まれたのだが、帥中納言が亡くなってしまい、阿波局は尼になって、

宇治に移り住む事になる。童君の父である府生は、その尼君の母親の兄弟であるので、父と尼君は叔父と姪の関係になる。尼君と帥中納言との間に生れた子は、元々は女院の下で暮らしていたのだが、宇治の尼君が退屈だとの斟酌から、五年程前に宇治に迎えられた。それが山吹君でこの姫君は何か物思い勝ちで沈んでばかりいるので、それでは誰かを世話しようと言う事で候補に上ったのが、先大式だったという事になる。

童君のこんな話を長々と聞いた後、松陰中納言(田鶴君)は、大式に山吹君を取られてしまうかと胸がいっぱいになったが、松陰三位中將(田鶴君)は、童君に自分と山吹君とは兄妹と嘘をつく。しかし、女院の取り持ちで、先大式と山吹君との婚礼話が進み、遂に大式が山吹君を迎えに来てしまう。先を越された中將(田鶴君)は、こここと隙を狙っていたのだが入る隙もないので、船に乗って小高い柳を目印にして漕ぎ寄せる。先に邸に入った大式は、一人で残る事になるからと、尼君と姫君の同行をすすめるが、尼は修行に専念するという事で一人残る事になる。

山吹君の心は、まめまめしく手紙をくれる松陰三位中將(田鶴君)と、母の薦める大式との間に揺れ動き死を選ぶ。山吹君の死を思わせる空っぽの靴が岩の上に残り、山吹君の遺言もある。尼は山吹君の衣の裾の歌に言い添えて、同じ川の淵に身を投げた。高齢の上に、山吹君の死を悼んで居たので、尼君はそのまゝ亡き人となってしまった。この物語の面白さはこの後の逆転劇である。このまゝだと浮舟物語の形で終ってしまうが、

一種の行動劇がこの後に付加される。この物語は実に躍動的で、大弐に先を越された中將(田鶴君)は、舟を岸かげに寄せ途方にくれていた、ちやうどその位置に、身を投げた姫君(山吹巻)と後を追った童君(兵衛の府生の子)が落ちてきたというのだ。この話の内容は弁の君に向つて童君によつて語られる。

九条の家にかへり給ひて、「爰にてこそ、御わさをすれ」とて、わらは君めしいたされてたいめんさせ給へは、「なき人とこそ思ひなしつるに、いとこゝろえられぬ。君はいかにならせ給へる」と涙にむせふ。「大弐の御むかへにわたらせ給へは、とのはかともよりもえり給はて、せんかたなさに、御舟にめされ岸かけにこきよせ給へるに、姫君の御けしきのいとたゝならず見えさせたまふるまゝに、御あとをしたひて見奉れば、岩のうへにたゝせたまひ、うへの御きぬを柳にぬきかけて、其まゝ御身をしつめさせ給ひしほとに、をくれたてまつらしと、ゝもにつゝき侍りしに、とのゝ御船の内へおちいらせたまへは、御舟をとほせて、ふしみの里より御車にたてまつりて、これにこそわたらせ給へ。かはかりふかきえにしなれば、御後の世までたのもしき事にこそ。さそあま君のなき人となけかせ給はんすれ。大弐はいかゝおはしつるにや」とかたるに、「されはに。あま君は、しやうしにかゝせ給へる御うた、柳のきぬを見させたまひて、おなし道にとて、ありし渚にこそしつませたまへ。大弐は、『かはかりのうき事を、いかてよそには

見はてん』とて、かしらおろして宇治山にこそさふらはせ給へ」と云に、むねつふるゝ。おとこ君は、あはれときかせ給ふて、「御あとの事はしかくしてけり。まつ君にはつけさせ給ふまし。人のうらみもいとふかゝらん」とて、弁の君を具し給ふて「けふ、君のふるさとへおもはずまかりてさふらへ。あね(姉齒の松)はの松をこそ」とのたまはすれば、「うれしくもきかまほしかりつるに」とて、「さそなけかせ給ふらん。此世にあるとほのめかさはや。大弐のうらみもふかゝらん」とて、御涙くませたまへは、「よき折からはからひて」とて、ともになく。

よそちの御賀もちかつかせ給へるに、おほきおとゝにさへならせ給ふて、いかめしき御よそほひの世にためしなきまてにわたらせ給ふ。……

○

宇治での出来事なのであるが、見慣れない扇があつたのを尼君が拾い、歌迄書かれてるのに驚くと狼狽した童君が、田鶴君が弁の君にあげたものを、山吹君が御覧になつていたのだらうと捏造する。尼は「げに、さもありなん。御客貌の、いとあてやかに、御心もまめまめしければ、君をもまるらせおきなば、いとめやすかるべけれども、へ女院の御心に、いかが思し給ふらん」と、思はぬかたへ思ひつけしぞかし。御手さへ、すぐれにけり」と、のたまふも、女君は聞かせ給ふらんかし。……へ女院の御心に……とは、女院は大弐を山吹

君の連れにと考えているのである。尼が思う、「思はぬかたへ思ひつけしぞかし」とは、阿部解によると、「三位中将（田鶴君・明言していいない）」と山吹君との関係に思い至ったという事なのだろうと思われる。これ以来、田鶴君・山吹君・尼・童君の関係が浮上して来る。

○

「宇治川」は最も波瀾に富んだ一章であるが、この一章を解するには、場所の移動と、童君の位置が問題の焦点となる。第一段は宇治川、山吹君と大弐の結婚が近いという話に失望した田鶴君であったが、姉ともども、山吹の女の側近くにあった童君に仲介を頼む。宇治の邸では管絃の宴が催されるが、田鶴君は宴には加わらず、童君と山吹君に会う算段をする。その夜、山吹君の母である尼君と童君の姉である弁の君をたばかり、遂に田鶴君は山吹君と会う事が出来た。第二段は田鶴君は一旦は京に帰り、宇治の山吹君とは文だけを慰められている。この間、恐らく童君は宇治の山吹邸に居て状況を観察しており山吹君を大弐が迎えに来るとの手紙が来た事を童君は田鶴君に伝える。田鶴君は宇治へ急行するが、既に大弐に先を越されていた。第三段は、宇治で、浮舟同様、山吹君は大弐と田鶴君との板ばさみの状況で煩悶し入水する。この後既に記した大弐の出家が記される。田鶴君は、女院から、尼君と山吹君の葬儀を引き受けたが、尼君の仏事だけを指図し、弁の君を連れて帰京する。第四段は京・九条の邸、姫君

の後を追い入水したはずの童君と対面した弁の君に真相が明らかにされる。推測だが童君は田鶴君より先に京に行き尼と山吹君の状況を女院に知らせていたのではないかと思われる。そうでないと尼の葬儀だけをするという女院の行為は理に合わない。大弐に先を越された田鶴君は、舟を岸かげに寄せ途方にくれていたが丁度その舟の上に、身を投げた山吹君と童君が落ちて来たというのである。この舟の中に落ちるといふ構想は別に新しい趣向ではない。既に「狭衣物語」にあり「うたたねの草子」に引き継がれているが、この位置にこの場面を設ける事は躍動感を与える。物語の末尾は、山井の屋敷を寺に改造し、四十賀が近づく松陰中納言の心境で終わっているが、その前に、山吹君入水の次のような挿話を設ける所にこの作品の特色がある。

（山吹君が） 御身を沈めさせ給ひしほどに、（童君） 〈遅れ奉らじ〉と、共に続き侍りしに、殿の御舟の内へ落ち入らせ給へば、御舟をとばせて、伏見の里より御車に奉りて、これにこそ渡らせ給へ。かばかり深き縁なれば、御後の世まで、頼もしきことにこそ。

問題の焦点は、「かばかり深き縁なれば、御後の世まで、頼もしきことにこそ」の解釈にある。阿部氏は、後半の三位少将を総て田鶴君と解釈しているので、次のような現代語訳になっている。

これほどの深い縁で結ばれているのだから、何とも来世ま

でも心強いことで。

この場合、深い縁で結ばれているのは、前後の文章から田鶴君と山吹君と考えられる。ところがこの部分、山本いずみ氏の訳では次のようになっていいる。

(お二人は、) これほどまでに深い縁で結ばれていらっしやるので、(現世ばかりでなく) 来世までも頼もしいことですよ。

文脈の解釈は同じであるが、主語が異なる。阿部氏の方は一貫して、後半の三位中将を田鶴君と解しているのに、山本氏の方は、一貫して松陰中納言で通している。そして具体的に田鶴君の船に落ちたのは、山吹君と童君であって、そこには山吹君を捜していた為、田鶴君は居なかったと考えられる。それなのに、「かばかり深き縁なれば」とあるとすると、山吹君の相手は童君との誤解を受けるが、それを解くのはその前の文脈との関連からと考えられる。

(童君は人水) 共に続き侍りしに、殿の御舟の内へ落ち入らせ給へば、御舟をとばせて、伏見の里より御車に奉りて、これにこそ渡らせ給へ。かはかりふかきえにしなれば、御後の世までたのもしき事にこそ。

つまり、舟の中に落ちた山吹君と田鶴君は、舟を飛ばせて、伏見から九条邸へと戻ったのである。生きて居る山吹君と、田鶴君との出会、これが「かばかり深き縁なれば」の意味と解せられる。その外、この山本氏の解釈を助けるものに童君

(山吹君の人水) の〈遅れ奉らじ〉の発言がある。山吹君の状況を見る為に後を追ったとも考えられるが、〈遅れ奉らじ〉の言はそのような余裕を感じさせない。童君が山吹君の世話をしていた事は推測されるが宇治で後追い自殺をする程のものでない事は事実である。「かばかり深き縁なれば」という言葉に疑問を持つのも、この物語の人間関係、山吹君・童君・松陰中納言・田鶴君の人間関係がしっかりと描き切れていず、幾らでも疑問を差し挟む余地があるからである。

二

長編的な時間感覚と挿話的な人物造形という二つの軸をこの物語を持っている為、全体として近代中編小説の面影が漂うのである。この物語のこの二つの特徴を示す為、その双方の性格の顕著に現われている部分を引用し、全体の構造を示唆したいと思う。系図ゴチックの四人のヒーローの出世物語と、松陰中納言を陥れようとする四人の男女の顛末が長編小説的要素であるが、ヒーロー・ヒロインたちを取巻く脇役はそれ以上に個性が光る。こゝではまず第一に小生意気な府生の息子・童君の個性が際立っている、その描写の特徴的な部分を抜き出す。山本いずみ氏の訳が流麗なのでそのまま引用させて戴くが、人物当では私の主張の方に変えさせて戴き、2の部分のみ長いので原文を引用する。

1 (松陰三位中将が)「宇治川の風景というのは、大変心に

しみるものです。恵心僧都が（宇治川の景色を愛して）お住みになったというのも、なるほど納得のいくことですよ。清い流れを見たのなら、さぞかし心も澄むことでしょう。（そうした清らかなところであれば、）寂しいこともないでしょうね。」とおっしゃったところ、（府生の息子の童君は、）「たまにご覧になるからこそ、（寂しい）山の景色もそのように（清らかでよいものだと）ご覧になるのでございましょう。（毎日そこで暮していると、）清い川の流れも、音がうるさいばかりで、（ゆっくり眠ることもできず）夢を見ることもできません。（出家して悟りを開いた恵心僧都のお心だからこそ澄みわたったのでしょう。（私のよ）うな俗人の心が澄むなどとはとても思えません。宇治川の傍に住んでいる）橋姫だって、ちょっと衣をひいて（寂しさ）分かち合える人がいればこそ、（夢も見られるというものでしょう）。（歌《さむしろに衣片敷きこよひもやわれを待つらむ宇治の橋姫》）」

2 三位の中將は、旅のうらぶれとて、遊びにもかかづらひ給はず、童君に、「今宵、（童君）会ひ奉らんずれ。道しるべを」と、のたまはすれば、「尼君のつきそひていますなれば、いかでか入らせ給はん。二位殿のまだ幼くわたらせ給ふ時、馴れ給ひぬるよし、常に語らせ給へば、御前に告げさせ給ひて、召されなん。御物語など候はば、そのほどは、姉ばかりぞ候はめ。それは我たばかりてこそ、あはせ奉らめ」と、

啓しければ、（童君）「幼な心に、よく思ひつけぬ」と、思されて、弘徽殿に候ひ給ひし阿波の局の、髪おろし給ひて、これに候ひ給ふ御ことを聞き給うて、昔の御物語をもせまほしきやうにのたまへば、（童君）「召され給うて、こもとの名所などを、尋ねさせ給へかし」と、のたまはすれば、（藤内侍）「まことに、その人の行方、聞かまほしかりつれ」とて、やがて召されければ、喜ぼひてまゐり給ひぬ。過ぎつることども、かたみにのたまひ明かさせ給ふ。童君まゐり給うて、「今こそ、人少なに候へ。妻戸口に立たせて、待たさせ給へ」とて、こなたよりまゐりて、（童君）「尼君は、いづくにかわたらせ給ふ。このほどの、御物語もせまほしくこそ。殿のかたには、物の音の始まりて、いとおもしろく聞こゆなり。都の人は、いと珍しければ、垣間見給へ。右大將の御笛の音などいへば、さこそおはさんずれ」。尼君も、御前に出でさせ給へば、（童君）「初は、御宿直し給へ」とて、あるかぎりまゐりければ、「初瀬詣でに、いといたう困じぬれば。人のまぎれ入りなんことも侍りなん」とて、戸をたつれば、男君入り給ひて、年月、おぼつかなく思ひ給ひしことどもを、語らせ給ふに、（童君）「まろはいづくにか、開かせ給へ」と、のしるを、姉の声と聞きなして、（童君）「君も、よく寝ねさせ給へば、尼君の帰りますらんほどは、それに渡らせ給ひて、御供をせさせ給へ。明けなば、君のおどろき給はん。人のまぎれ入りな

んこともこそあれ。都人のよそほひを、よく見ならひ給へかし」と、言はれて、「さらば、(弁の巻)尼君の御供に侍らん。眠らでませませ」とて、いぬ。

「(田鶴君)よくたばかりにけり。観世音の、まろが心に、宿らせ給ひぬるにや」と、うち笑ませ給へば、「(童君)御仏も、迷へる衆生を、尊き所へ導かせ給ふなるを、我が御道標も、それに等しくこそ」と、うち笑へば、(田鶴君)「をかし」と、聞かせ給ふ。

3 (ちようどその時、尼君は、) 妻戸の傍に扇が落ちていたのを (見つけ、不思議に思つて取り上げて、「これは見覚えのないですねえ。歌もとてもお上手に書いてありますよ。一体どなたが落としたものなのでしょううか。」とおっしゃったので、(思いがけないことに) 驚き、(童君はとっさに作り話をした。)) 「初瀬で、松陰中納言殿が (私に) 下さったのですよ。(それを私が姉の弁君にあげたのですが、(とても美しいので、きつと、) 姫君がお取りになってご覧になったのに違いありません」と申し上げたところ、(尼君は、) 「なるほど、そういうことなのでしょううね。(この扇の持ち主であった松陰三位中将殿は、) ご客貌が大変気高く、お心も大層まじめでいらっしゃるので、……大変機転のきく小賢しい少年の姿が良く描かれています。

○
東国を平定した右衛門督の前で行われる、後の月の宴の漁師の動きもリアリティに富んでいる。

いとぎよらにふなよそひして、また暮ぬほとには、海士ともをめして、をのかとりくしのしわさをせさせ給ふに、めなれさせさへ給はねは、いとめつらしき事におほす。『浪のうへを我物かほにうきしつむは、水鳥のむまれきにけるにやと、さきの世の事までおもひやられるれ。浪まかきわけいていぬるは、ちいろのそこにや』とおほす。いと久しくありて、岩のうへにあかりて、いきもつきあへぬは、見るめさへいとくるし、みふねちかくめされて、みきたまふに、水のうへにうかひて、さかつきをうけなから哥うたふ。東哥なめりとおほせと、いときくもわかれ給はす。何事をいふにかあらん、くちくくにさへつるを、人にとはせ給へは、『うるはしきみきのあちはひかな。あくまてたまはらは、のちの世までのおもひてならん』とこそ」とけいすれば、『いとやすき事にこそあれ』とて、おほきなるかはらけを浪のうへにうかへさせ給へは、よろこひて、ひさけみつきかりつゝのむ。『もろこしのふなのりすなる、やよひの比のなかめも、かくまてはあらし』とおほすに、あるかきり海へつふくといるを、『いかゝする事にや』と御らんすれば、あわひ、にしのたくひをかつきあけて、「御さかなに」とて、たてまつる。

その中に、なをかたちのあやしけなるか、ほおきなりける玉の、色くの光りあるをさくけて、「年久しく、身をはなたてもたまへれとも、『こゝはと思はん人になたてまつり

なん』と思ひ過し侍る。聖徳太子に、くたらのみかとより
まいらせられしを、もりやのぬしのうは、せたまひて、な
にはのうらにしつめられしを、我物にして侍る。三千とせ
斗もこの海にはへりつれとも、かゝるおもひてこそなかり
つれ」とて、御ふねにあるかきりのみつくして、浪のうへ
にたちて舞けるを、いとあやしくおほして、色あるきぬを
かつけさせ給ひければ、

色も香もふかくはあれとわたつ海の

我にことたる浪のぬれきぬ

とて、御ふねのうちへなけかへして、千尋のそこにしつむ。
蟹ともをいれてみせさせたまへとも、いっちにゆくらんも
しらす成にし。……

このような躍動感とは関係なく、この巻二の挿話は巻五「花
のうてな」に続いて行く。

源中納言の、あつまのうみにてあやしきものゝたてまつり
(右衛門督)
たる玉をさゝけ給ひぬるに、玉のうちにくはんせをんの御
かたちのあらはせさせ給ひて、御堂のほかまでも光りのみ
てみつるも、末の世にはめつらしき事にあるそかし。ほり
出させたまふ石の箱のうへにすゑさせ給へり。うへよりは、
左中弁のきみをして、僧正になさせ給へるも、そのおりの
御ほるにやとおほす。

(傍点は私の付したものであるが) 観音信仰が背後にある事
を窺わせる文章である。

今一つ信仰の話が出て来るが、こちらの方はあまり具体性が
明らかではない。松陰中納言が隠岐島で夢を見、阿闍梨に解
いてもらった所、大變頼もしいとだけあって、その結果が
「うるかふり」の最後に次のような形で承け継がれる。

(池を) いと心おほきにほらせ給ふ。五尺はかり下に光
りのさしけるをあやしみて、なをほらせ給へは、石の箱の
ありけるに、文字あまたありけにはみえなから、苔むして
さたかにみえわかれます。おとゝも僧都も、嶋にての夢のつ
けをおほし出て、ともに涙くみ給へり。錦につゝませて、
「つけさせ給ひし時にこそ、ひらくへかめれ」とて、御堂
におさめさせ給へり。

漠然とした著述で明瞭な了解を欠くがこの物語の時間性を示
す挿話である。この外に神秘的な事柄としては少弐の体験を
話す侍従の南海の話がある。

大弐とおなし道にくたらせ給へるに、おなし風に御船のち
りくに行あかれて、いつくなるらん、嶋とおほしき所に
わつか成松の見えけるに、舟のうちよせられけるほとに、
枝にとりつかせ給へは、舟はそのまゝしつみぬ。浪のかへ
りし跡にて見給へれば、嶋陰の岩ねよりさし出て、梢まで
は六七丈もあるらんと見えて、見おろし給へるさへめくる
めきて、そのまゝおちぬへき心地とするなれ。せんかたな
くてありけるに、木のもとへは、えもいはれぬかたちなる
ものともよりくるに、なをすさまじ。うつし心のうちに

も『佛の御ちからをたのまんよりは』と、くはんせをんの御名をとなへさせたまひて、一日一夜か程を過し給へるに、ほのくくと明わたる比ほひ、下枝を見させ給へは、大きな鶴の羽をやすめてありけり。『とても命はいきし』とおほして、くひにとりつきてのり給へれば、むつかしけなるさましてこくうにとひゆく。見おろさせたまへは、雲ははるかの下にたなひきて、絶ま／＼より冷しき海のみゆるに、『ありし松の梢よりもあやうしや。こま、もろこしのかたへや、つれ行』とおほすに、嶋のありけるにおりて、羽をやすむるよし。『嶋もりとならばならなん』とて、其ま／＼おり給ひて見わたさるゝに、あやしき庵の有けるに立よりたまへて、『こゝはいづくにや』ととはせ給へれば、おきなの出で、『あやしき御ありさまにこそ。これはいわうか嶋とて、人すむ所にもさふらはぬに、あやし／＼こそ』ととかめられさせ給ひて、『風にふかれて、舟は浪の底になれぬれと、からき命斗をいけるものにこそさふらへ。つくしへ行へきたよりをしらせ給へ』との給へれば、『我も十とせ斗かさきに風にふかれてより、此嶋にすみ侍り。つくしより舟のかよひも、一とせか内にひとたひはかりこそさふらへ。さそ、つかれますらん』とて、木のみ、いそななどを参らせければ、この世ならすかうはしくおほして、つかれをわすれさせ給ふ。なをせんかたなくて、くはんせをんの御名をとなへさせ給ひて、日ををくらせ給ひけるに、

しろきからすのとひ来りて、みきはに打あけられたる魚をひろふ。『めなれさせ給はぬ鳥にこそ。からすにや』とはせ給へは、『あれは宰府の森につねに侍り。此所にうをおほく浪にうちよせらるゝをしりて、つねに来りてゑはみさふらふや。神のつかひたまへるゆへにや、つねならぬさまにこそ』といふなるをきかせたまひて、『我かへるへき時のきたりけるにや』といと頼もしくおほせと、せんかたなし。おきなに、『あの鳥とらへてんや』との給へれば、『我にはなれと、友のことくこそ』とて、行に、騒もし侍らねば、ちいさき文を鳥のはねにむすひつけさせ給へれば、羽をのへて雲に入。さいふには、少弐の行衛なくならせ給へるを、心もとなからせ給ひて、神にまうてゝいのりたまへるに、からすとも羽さきにありけるを、れいならずにおほして、かななきをしてとらせて見給へるに、それとしらるゝ筆つきにて、

「わくらはにとふ人もかなさつまかた

おきのこしまに我はありやと

おもはぬ風にさそはれて」など、そこはかとかきたまへるを、あはれと見たまひて、はやふねあまた御むかへにやらせたまへは、うかりし嶋の御住ゐに、おもひかけ給はぬ御ふねのよりきて、『とくめされなん』といひのゝしれは、夢の心ちそし給ふめれ。『おきなもかゝる所にあらんよりは』といさなはせ給ふに、『我は都の東山のかたへか

へる也』とて、光をはなちて雲にのらせ給へれば、かたしけなき御ちかひに袖をしほらせ給ひつゝ、さいふにつかせ給ひて、『御佛の御めくみにこそ、ふしきのためいんし給ひつれ。都へかへらんまでは、此こともらしきふらはし』との給へしを、きゝさふらひて、我もくはんせをんをいのりたてまつりて、つみゆるされん事を思ひ給へるにこそ」

(傍点は私のものであるが)この挿話も観世音と深く関係する。又、仏は多く翁の姿をとって現われ、硫黄島も使われている。この外、唐犬が思い出の道具として使われるが、これは挿話性の面白さの方ではなく、この物語の時間性を示す方に用いられる。第二卷「あづまの月」に現われる話で、下総姫君の歌を書いた翁と、右衛門督の歌を書いた香箱の交換役に下総守姫君の弟が使われ、その礼に右衛門督が唐犬の置物(その意味するものは不明)を与えたのである。この挿話が、卷五卷「花のうてな」で回想される。その文章は次のようになっている。

宮はもふけの君にたゝせ給ひければ、源中納言、東宮大夫(東宮は御八講の主権者の代表)をかけ給へるに、大弐のつくしよりかへり給ふて、からの犬のいとちいさきをみやへたてまつられけるを、あつけさせ給ひけるに、おほし出で、御袖にかくしてかへらせ給ふ。(源中納言は、妻上山女、た時のことを)対へわたらせ給ひて、「あつまにてちきりをきつる物をこそ、もとめ出でさふらへ。それよりまいらせ給へ」と打えませ給へは、(下総姫君)「老たまへとも、御物おほえのよくこそわた

らせ給へ」とて、ともにえませ給へる御まみつきに、十三夜の月をおほし出させ給ひて、

ともに見し月は心にやとりけり

あつまの海の浪ならねとも

これは時間性を感じさせる部分であるが、この物語は、こうした従来の時間性以外に脇役に生々とした個性を与えている。こゝでは、兵衛府生の童君の言動に照明を与えたが、その最たるものは藤内侍の侍従で五十を越している。したゝかで、道化的な上に、どこか意地悪く、憑霊的要素も持っている。その上挿話的に絡むのみでなく、松陰中納言を陥れた四人の中の一人であり主要人物であるがこの偏頗な根性の持主はこの物語の中で最も特異であり、「我が身にたどる姫君」の前斎宮同様、王朝末期物語に現われるエキセントリックな女性として別稿で人物論として分析の予定である。その他山井中納言の北の方の嫉妬深さも画かれ、昔屋姫君の生き方に絡んで来るが、描写部分はそれ程多くない。物語の中枢と挿話を兼ね備える女性として縦横に活躍するのは侍従に如くものではないのである。